

# 西海道の古代出土文字資料

柴田博子

## 一 西海道木簡の出土と研究

西海道に関係する木簡が最初にみつかったのは、一九六三年、平城宮跡にて出土した西海道諸国からの調綿木簡であった。一方、九州での木簡の出土は、一九七〇年の大宰府史跡第四次調査藏司西地区に始まる。その後は、一九八四年に福岡県小郡市井上薬師堂遺跡、一九九〇年に福岡市鴻臚館跡、そして一九九六年に福岡県北九州市長野角屋敷遺跡、九八年に福岡市元岡・桑原遺跡群、九九年に大分県国東市飯塚遺跡と、一九九〇年代後半に入つてから連続して注目される木簡が出土している。

このような出土状況であつたためか、西海道木簡に関する研究はもっぱら平城宮跡出土木簡が分析・検討の対象とされてきた。一九七八年、今泉隆雄氏は平城宮跡第二次内裏北外郭地区土坑出土の西海道諸国調綿付札二七点を検討され、木簡の樹種には針葉樹が多い中でこれらがすべて広葉樹であること、形態は切り込みの紐の当たる部分が鋭角にならず丸く作られているものが多いこと、書式の共通性と、書蹟には国・年次を異にするものに同筆があることから、これらの付札は大宰府で一括して作成されたものと指摘された。<sup>(1)</sup> 西海道木簡研究の嚆矢となる研究である。なお樹種については大宰府跡で出土した木簡には針葉樹も多く、今後の課題である。

さて、西海道の地域で古代の木簡を出土している遺跡と点数を『木簡研究』『全国木簡出土遺跡・報告書綜覽』『太宰府市史』(古代資料編)などにまとづいて集計してみると、質・量ともに大宰府跡が圧倒的である。八〇〇点余の削り屑をふくめ、出土点数は一〇〇〇点を越える。これを除いた筑前国では一七五点、うち一遺跡で一〇〇点以上の木簡を出土しているのは鴻臚館跡、元岡・桑原遺跡群、高畠廃寺の三遺跡である。一方、筑前国以外の出土点数は、筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向・薩摩の各國と壱岐島をすべて合わせても一二〇点にしかならず、筑前一国に及ばない。一遺跡で一〇点以上の木簡を出土しているのは、肥前国の中原遺跡と豊後国の飯塚遺跡の一ヵ所にとどまる。また、大隅国・対馬島では古代木簡は

未発見である。

このように、これまでのところ古代木簡の出土点数は圧倒的大宰府跡およびこれをふくむ筑前国に偏っている。大宰府跡出土木簡については一九七六年と一九八五年に概報が刊行され、また二〇〇三年刊行の『太宰府市史』(古代資料編)には大宰府に関係が深いと思われる木簡が集成された。しかし西海道木簡の研究状況は、大宰府跡出土をふくめ、遺跡ごとに別々に紹介されるにとどまってきた。この点で、木簡学会九州特別研究集会は西海道出土木簡をまとめて取りあげる初めての研究会であり、西海道木簡研究の第一歩と位置づけられよう。

ただ、西海道の全体を見渡そうとするならば、古代木簡は筑前国に集中し、それ以外の地域での出土点数があまりに少ないとから、検討材料としては限界がある。出土文字資料には、他に漆紙文書や文字瓦、金文等もあるが、これらも現段階ではやはり九州北部に偏っている。そこで本稿では、九州中部・南部でも相当量が出土している墨書土器をも取りあげることで、西海道の古代出土文字資料を地域全体にわたって概観し、今後の研究のための序としたい。なお、他で詳細に取り上げられる大宰府跡、元岡・桑原遺跡群、鴻臚館跡、中原遺跡の木簡については、原則として言及しなかった。

## (一) 七世紀以前

単発的なものではなく、律令制下へ続いていくような文字の使用は、九州では六世紀末から七世紀にかけての時期に始まるようである。

まず、土器への線刻・ヘラ書きは、六世紀末～七世紀前半には周防灘北部沿岸、遠賀川流域や福岡平野<sup>(3)</sup>、また佐賀平野でみられる。<sup>(4)</sup>最近では、福岡県大野城市的本堂遺跡で、七世紀第2四半期とみられる須恵器の大甕の頸部に「大神ア見乃官」とヘラ書きされたものがみつかった。福岡平野南部には本堂遺跡周辺をふくめ広大な牛頸窯跡群が展開しており、須恵器窯の操業に関わる工人が七世紀前半に部民として掌握されていたことを示す資料とみなされている。<sup>(5)</sup>また、硯や転用硯も六世紀末から七世紀半ばには、周防灘北部沿岸や筑紫平野<sup>(6)</sup>で出土している。したがって、筆・墨を用いて文章を筆記することがこの時期には始まっていたことが窺える。

木簡は七世紀後半のものから確認される。紀年銘のある元岡・桑原遺跡群の木簡を除けば、七世紀後半と判断できるのは「評」木簡である。大宰府跡では「久須評」(豊後国)<sup>(7)</sup>や「合志」(肥後国)の

## 二 西海道における古代出土文字資料の様相